

Title	<批評・紹介>佐口透著 新疆ムスリム研究
Author(s)	新免, 康
Citation	東洋史研究 (1996), 54(4): 781-790
Issue Date	1996-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/154546
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

評と併せて御参照を頂ければ幸いです。

Stanford University Press

1994, xii+340pp.

佐口透著

新疆ムスリム研究

本書の構成の大枠を示す。

新
免
康

序説

I カシユガリアのムスリム

1 宗教的生活秩序

2 聖職者と教學

II アーフアーク廟墓の三百年

1 アーフアーク廟墓の發見

2 アーフアーク廟墓の様相

III 砂漠の聖墓

1 殉教街道

2 殉教者の國

3 タリムから天山へ

IV タリムの水邊ムスリム

1 ドーラーン人の歴史と民族誌

2 ロプ人の歴史と民族誌

V 哈密のムスリム

1 哈密公國の形成

2 ムスリム反亂期の哈密

3 ムスリム王と民衆

結語

附篇 中國回民の宗教的生活秩序

文獻目錄

索引

内容の要約は以下の通り。

序説では、トルコ系ムスリムとしての東トルキスタン住民が、清朝統治下、異教徒による支配とは無關係にイスラムの基本と宗教的生活秩序を遵守してきたことを指摘し、本書で、その「イスラム制度、ムスリム社會の實狀を歴史的かつ民族誌的に編集する」ことで、その「イスラム性を探究する」と宣言する。

一章では、清朝統治期におけるトルコ系ムスリムのイスラムの諸様相に觸れる。まず、義務行爲「五行」にまつわる『西域圖志』・『回疆志』・『西域聞見録』の記事、また、イスラムの二大祭り・バラート祭などの年中行事や婚姻・誕生・命名・教育・割禮・葬禮などの習俗についての、上記漢語史料や Katanov・Grenard・Pevsov・Valihanov らによる文章中の記事を列挙する。次に、アホン、ムッラー、カーディーの役割、清朝統治下におけるイスラム法運用の實態に關して Rhins・Pevsov などの著書から示し、マシド、とくにカシユガルのジャーミーについて言及する。マドラサと教學については、Forsyth・Shaw・Hartmann など一九世紀以降のヨーロッパ人の記録をもとに、とくにヤルカンドの狀況を紹介する。あわせて、『西域聞見録』と Lansdel の著作からカランダール（＝神祕主義者）についての部分を拾う。

II 章では、カシユガル東郊にあるアーファーク・ホージャのマザール（＝廟墓）についての資料を整理する。まず、清朝期の『回疆志』・『西域聞見録』・『回疆通志』における敘述を抽出し、Bellew の「カシユガル史」や *Tazkira-i Husnagan* などからその起源について検討する。Shaw や Forsyth が一九世紀後半にこの廟を訪問したときの報告を引用したあと、蕭雄がホージャ一族の墓と「香妃墓」を別物と誤解し、それがその後の中國の著者たちの記述に尾をひいたと指摘する。次に、中華民國期に訪問した謝彬・Eherton・Jarring、人民共和國成立後に派遣された蒲熙修、スウェーデンの作家 Jan Myrdal などによる記事を列挙する。中華民國期についてはとくに、この廟墓のワクフをめぐる係争に關する新疆省都督楊增新の指令全文を翻譯して載せる。

III 章は、東トルキスタン各地域のマザールについてである。まず、東トルキスタン最初のムスリムとされるサトゥク・ボグラ・ハーンの廟墓、殉教者とされるアリー・アルスラーン・ハーンの廟墓など、カシユガル、ヤルカンドの廟墓に關する Forsyth・Valihanov・Hedin・大谷探検隊・Stein・Eherton・Jarring・Pevsov・Mannheim らの記事を順次並べる。この地域にはイスラム殉教戦士などの廟が多數あり、ムスリムの尊崇対象となつていたという。ホタンでは、ニヤ北方で殉教したとされるイマーム・ジャーファル・サーディクの廟墓について Pevsov と Grenard が採録した傳説を紹介し、廟の二〇世紀初頭における實情も傳える。とくに、トゥルファンのマザールを Katanov の口碑資料をもとに簡単に列挙する。最後に、東トルキスタンのマザール全般に通じる傾向として、形態の固有性とロケイションから、その信仰の非イスラ

△的側面を強調する。

IV章では、オアシス居住の一般的なトルコ系ムスリムとはやや異なる少數「種族」集團を扱う。まず、「ドローラン人」をとりあげ、かれらが清朝のベグの管制下にあった一八・一九世紀については清朝史料から、一九世紀後半～二〇世紀初めについては Forsyth・Kurupakin・Pevsov・Hedinらの著書から、その政治的動靜や居住地の様子、とくに漁撈・狩獵を中心とする生業の實態、特異な風習などについて觸れる。次に、「ロプ人」について、一八世紀にジュンガル勢力への對應のなかでロプ地域に進出した清朝官吏による報告を丹念に拾うとともに、Forsyth・Przeval'skii・Pevsovらの敘述にある「ロプ人」に関する情報や口碑資料を掲げて、そこに一五世紀以降の歴史の側面の反映をよみとるが、その種族史を構成するのは困難と結論する。また、住地の様相、漁撈に従事する獨特の生業形態、習俗・儀禮、信仰などについて、ヨーロッパ人の觀察から活寫する。

V章は、ハミという一オアシス、特にそこを支配した郡王に焦點を當てる。まず、一七世紀末以後の政治史を清朝史料をもとに検討する。ジュンガル勢力の支配下にあったハミの頭目ウバイドゥツラーはガルダンの没落を機に清朝に忠誠を誓い、その子孫(郡王)が清朝統治下で、代々領土を安堵された半獨立の「公國」をハミで保持したと論じる。あわせて『西域圖志』・『回疆通志』・『林則徐日記』などよりハミの二城市(＝回城・漢城)、ハミに屬する主要な五城村について述べる。次に、一八六四年に勃發したムスリム反亂の時期のハミの情勢の變化を漢語史料をもとに迫り、郡王が一貫して清朝に忠誠を示したと主張する。また、『聽園西疆雜述詩』・『哈

密直隸屬鄉土志』や Grun-Grzhinatio・Mannerheim・Young-husband・Przeval'skii・Le Coq・大谷探險隊・Stein・林競・Hedinの敘述から、ハミの諸様相や當時のハミ郡王、シャーハクスードの出身や人となりについての情報・觀察を傳える。最後に、郡王と住民に關して、前掲著者や蕭雄・日野強・謝彬などによる回城や王宮についての記事を整理する。二〇世紀初頭に訪問した Caruthers の記述や Katanov の口碑資料によれば、敬虔なムスリムたる郡王は領民にイスラム法を遵守するよう嚴しい措置を講じたという。また、莫大な牧場資産を保有した郡王は專制的領主權を運用し、領民に苛酷な徭役を課したという。

「結語」では本書が、「異文化と接觸、共存してきたかれらのイスラム信仰、聖傳、マスジド、マザール、宗教的生活秩序に關する情報を民族誌的に編集し、さらにその歴史的檢證のためにハミ地方のムスリム社會を集中的に考察することを目的としたもので」であると評したうえで、「全體として一八～二〇世紀のカシユガリアのムスリムの實態を民族誌的に編集する試みであった」と總括する。

「附篇」では、著者が一九四四年七・八月に内蒙古回民調査團の一員として従事した民族學的調査をもとに發表した『民族學研究』掲載論文(一三―一四、一九四九)の一部を再録する。調査時點における回民(現在の回族)の社會において、マスジドと宗務者がどのような状況にあるのか、五行(＝イバードト)を中心とするムスリムの義務行為がどのように行われているか、イスラムの二大祭りやマウルードなどの祭典・年中行事が回民のあいだでどのように行われているか、また、誕生・命名・割禮・婚姻・葬禮・迷信・服飾などの習俗の實態はどうか、という諸問題について個別に述べられ

る。
 末尾に文献目録（邦文・漢籍・中國文、歐文）と索引（邦文・歐文）が附されている。

まず、本書は、著者の歴年の研究活動との關連においてどのような形に組み立てられているだろうか。本書は純然たる書き下ろしの著作ではない。しかし、過去の論文をそのままの形で適宜配列して一つの著作の形態にまとめたものでもない。たしかに、本書の大半は、以前に出版された論文あるいはモノグラフの一部が元になっている。I章の1は『十八—十九世紀東トルキスタン社會史研究』IX章の「東トルキスタンのイスラム」、IV章の1は「東トルキスタンのドラーン人——歴史と民族誌」（『攝大學術』Ser. B, No. 6, 1988）、IV章2は「ロブ人の歴史と民族誌」（『内陸アジア史研究』六號、一九九〇）、V章は「新疆コムのイスラム公國——哈密郡王領の歴史——」（『東洋學報』七二卷三・四號、一九九一）の、それぞれ増補改訂である。II・III章の一部には、本書自體には注記されていないが、「新疆（東トルキスタン）のイスラム——その寺院と廟墓——」（『攝大學術』Ser. B, No. 7, 1989）の敘述と重複する部分がある。すなわち、I章を除けば、一九八八—一九九一年に出版された論文と對應性がある。注意すべきは、これらの部分について、既刊論文がそのままの形で組み込まれているのではないということである。いずれの部分も、とくにV章は比較にならないほど多くの情報が増加され、原形をとどめないほど擴充・増補された独自の内容を示している。原論文の方が歴史を再構成するための議論の道程が明解という印象を與えるほどである。單なる増補の次元を越えたこの

ような改變は、本書出版のためのものであるとともに、實際の研究活動において扱われながら、掲載分量の限定される「論文」では収録對象から排除された多様な材料が躊躇なく投入された結果と想像される。これにより著者の博搜ぶりの一端をかいまみることができ、本書は、文字化された過去の業績の寄せ集めではなく、たゆまなく推進されてきた著者の最近の研究動態の豊饒さを忠實に反映するものである。

このように本書が、基本的に、著者による最近數年間の最新の研究所産をわれわれの前に開示するものであったとすれば、それは、著者によって長年にわたり精力的に展開された研究作業・成果のなかにどのように位置づけられるだろうか。著者による東トルキスタン史に關する主要な仕事としては『十八—十九世紀東トルキスタン社會史研究』と『新疆民族史研究』がある。このうち、前者では主に、清朝のトルコ系ムスリムに對する統治體制の特質の究明、鄰接するコーカンド・ハーン國との政治的・經濟的關係の諸相の解明など、東トルキスタン史のいわば「本筋」を見極めるべく膨大な努力が注ぎ込まれた。これとの關連でいえば、本書のI—III章は、すでに扱われた歴史の「本筋」の傍らで、當地域住民の社會・文化において大きな比重を占めてきた信仰世界の樣態に光を當てたものである。他方、『新疆民族史研究』では、東トルキスタン全般の歴史の「本筋」を扱った前著に對し、トゥルファンという一オアシス、イリのタランチという一地域集團など、やや規模の小さい對象に焦點を合わせることを通じて、「本筋」と密着する歴史の細部を掘りおこす試みがなされたと思われる。この手法は本書でも採用されている。『民族史研究』でのトゥルファンについての考察は、清

朝の當地域支配、郡王領の成立と展開、トルファン城についての諸資料の記述を含むものであり、『新疆ムスリム研究』のコムルについての考察（V章）に繋がる。また、『民族史研究』におけるタランチャサリク・ウイグルに関する研究は、IV章のドーラン人とロプ人についての考察と類似性がある。このように、『新疆ムスリム研究』には、内容・方法の両面で以前の二著書と明瞭な連関性が認められる。本書は、まず、『社會史研究』で扱われた政治・社會の裏面におけるトルコ系ムスリム住民のイスラム信仰などの側面に注視して探究するとともに、他方で、『社會史研究』と相互補充的な形で『民族史研究』が扱った「ミクロ」な對象の範圍を廣げ、新たな對象に對する考察を繰り出したものであると評價されよう。前二著と接合されるならば、著者自身による清朝時代の東トルキスタンについての歴史敘述の一層の廣範化が實現されることは言うまでもない。しかも、本書自體、I～III章の廣域的な議論とV章の「定點觀測」とが結合された立體的な構成を備えている。

一方で著者は、前二著や本書におけるような新疆のムスリムの民俗面に對する文獻的アプローチが一九四四年の調査體験を起點とする、と述懐している。このことを考慮すると、著者の主要な研究對象であった一八～二〇世紀の東トルキスタンのトルコ系ムスリムにまつわる民族誌情報の提示が冒頭に配置され、「起點」としてのフィールドワークの報告をもって完結することを通して、本書が著者の研究の全軌跡を締め括るものであるかのような印象を與える。しかし、本書をこれまでの著者の研究の總括ととらえることはできない。讀者は、本書を通じて、これまでの著者の研究の全體像を見通すことができる、あるいは佐口史學の核心を會得できることを期待

してはいけない。本書は前述したように、前著までに實施された研究との連續面において、前者以後に進められた研究作業の産物であり、過去から將來へと連なる著者の研究活動のうちから切り取られた過去數年間に屬している。將來、この著書以後になされた研究の新たな成果が世に問われるであらう。著者は本書で、自ら立ち止まり、自らの「歴史」を振り返って終止符を打ったわけではあるまい。怠惰で矮小な研究者たちがそれに觸れることで脅威を感じる歴史敘述の發信裝置は、今後もしまることなく稼働し続けるに違いない。

さて、最近の東トルキスタン史研究を眺めると、その一部は、當地域住民による史料に主に依據しつつ、これらの動向に主眼を置いて歴史を組み立てるといふ意志に裏打ちされているように思われる。縦横に「現地語」史料を駆使し、それ以前の當地域の歴史的過去のひだにまで立ち入りつつ、一九世紀後半の反亂の性格を解析するべく精力を傾注したキム・ホドン氏の仕事（出版豫定）や、當地域トルコ系ムスリムが著した史料を徹底的に讀み込むことを通じて、これらの精神世界の構圖の特徵的な斷面を具體的な權力關係・社會關係との關係性のなかから浮き彫りにする濱田正美氏の研究がある。評者も、微力ながら二〇世紀前半の東トルキスタンの政治史をトルコ系住民の史料に基づき、これらの意識と行動を通して描寫するといふ作業を進めている。これに對し、「支配」する側に焦點を當て、その統治の特質、それを支える思想的據り所の回路を、「中國」（王朝・國家）の政治體制のありようのなかで體系的に解明しようといふ企て（清王朝についての片岡一忠『清朝新疆統治研究』、人民共和國についての加々美光行『知られざる祈り』）が結實して

いる。民國期の「中國人」の邊境認識の枠組を問う試みも開始された(王柯「二重の中國」『思想』一九九五—七)。史料の面では、より根本的なものを求める傾向が加速している。民國期については領事報告などの文書資料の利用が本格化しており、未利用の根本史料である清朝期檔案、ロシア・ソ連政府文書、現地所在のチャガタイ語文書へのアクセスも視界に入りつつある。とくに本書との関連でいえば、チャガタイ語文書の精査は、異教徒支配のもとでのムスリム社會の實像に迫る道を拓くであろう。また、イスラム信仰の歴史的様相を究明するために不可欠の、當地域住民自身により著された「現地語」文獻の現存状況についての情報も飛躍的に増大している。

このような最近の東トルキスタン史研究の方向性に對し、本書の敘述様式・内容は一線を劃しているように見受けられる。前掲の要約からもわかるように、本書の基本的スタイルは、清朝時代の漢語史料や、一九二〇世紀に東トルキスタンを訪問したヨーロッパ人・ロシア人・日本人・中國人の旅行・調査記録から、清朝統治期・民國期におけるトルコ系ムスリムのイスラム信仰、マザール崇拜、特殊な種族集團や特定のオアシス地區の歴史・民俗、といったテーマ項目に沿った記事を翻譯して提示し、配列したものである。

著者自身、本書の方針を「カシュガリアームスリムの實態について過去の資料、記録の編集を試みたもの」としている。とくにテーマの設定のしかたにはユニークさが見られる。著者自身、「歴史學的研究であるとともに、多少、民族誌的考察でもあり、歴史學と民族誌のインターセクションに立った文化史でありたい」(p.iii)と稱している。もともと、この點に關して本書が、歴史研究として格段

の新機軸を打ち出したとは必ずしもいえない。例えば、本書でとり上げられたマザールに關しては、サトック・ボグラ・ハン墓廟やアルバタ・ホージャ墓廟の辿った歴史の軌跡が、具體的な政治的狀況のなかで演じた役割の變遷を中心に、トルコ系住民自身の著作や文書から、すでに再現されている(濱田正美「サトック・ボグラ・ハンの墓廟をめぐる」『西南アジア研究』三四、一九九一; Kim Hodong, *The Cult of Saints in Eastern Turkestan, A Draft paper presented at PIAC, 1992*)。

他方、「新疆ムスリム研究」が「インターセクションに立つ」というもう片方の民族學の方面においては、現在、本格的なフィールドワークを伴った研究活動が進捗中である。トルコ系ムスリムの信仰世界について、評者が直接知る限りでも、博士論文を準備中の研究者(東京大學・ケンブリッジ大學)が二人おり、出版された具體的な成果も現われつつある。また、「現地」研究者の調査や諸種の資料の蓄積もかなりの程度進展し、その結果の一部はすでに出版物の形で目にすることができる。例えば、現代ウイグル語の著作として Abdurahim Habibulla, *Uygur Etnografyisi* (Sinjang Häq Näsiyati, 1993) と Uygur Folklori haqqida Bayan (Sinjang Dası Näsiyati, 1989) がある。ウイグル人自身の手による體系的な民族學的な著作は從來皆無であり、そういう意味で劃期的な意義をもつ。とはいえこれらは、イスラム信仰が歴史上のある段階においてどのような状態にあり、どのような過程を経て現状に至ったのかということに關して、「新疆ムスリム研究」が引用する漢語や歐文の資料による文獻的な裏付けをまったく欠いている。兩者の對照性は際立っている。

この他、「現地」での調査の報告としては、『新疆ムスリム研究』のⅠ～Ⅴ章の内容に直接關わる資料を含む新疆社會科學院宗教研究所『新疆宗教研究資料』があり（非公開）、佐口氏がその成果をとりいれる時間的餘裕がなかったという蘇北海・黃建華・哈密、吐魯番維吾爾王歴史』（新疆大學出版社、一九九三）のなかで、ハミ郡王統治下におけるイスラムの政治的・社會的機能を詳細に議論する際に效果的に用いられている。また、言語學關係では、Ⅳ章でとり上げられた「ドラーリン人」の言語についてウイグル人の代表的な言語學者であるミルハスルタンが、「多郎維吾爾人與塔里木土語」〔西域研究〕一九九三（三）で分析を行なっている。「ロプ人」の言語についても調査データを収集・蓄積している。しかし、これらの研究は、『新疆ムスリム研究』の該當部分とは殆ど重複しない。佐口氏の著作では、ドラーリン人やコムル城市・コムル郡王について、ヨーロッパ人の實見に基づくヴィヴィッドな記録がフルに導入され、敘述の中軸を構成しているが、前述の「新疆」における研究では、それらに對する言及をまったく缺如している。

このように見てくると、本書の特色がいくらか鮮明になる。すなわち、一九世紀後半～二〇世紀前半におけるトルコ系ムスリムのイスラム信仰、マザール崇拜、ドラーリン人・ロプ人という特殊な集團の民俗、コムルの城市や郡王の形姿などについてのヨーロッパ人旅行者の觀察記録を編集して提供する、という點において生彩を放つ。著者の歴史に對する特殊な解釋や恣意的な史料操作に煩わされず、特定のテーマに關わる史料上の關連記事に、基本的な歴史の流れに沿いつつ容易に接することができる。最近の趨勢としての、當地住民自身の著した史料、様々な文書史料を用いた研究において

も、「旅行者」たちの紀行文からデータを攝取する必要性がない譯ではない。本書は活用するに値する内容を備えている。他方、進捗しつつある民族學のフィールドワークの見地からは、過去のある時點の當地の實態に對する「他者」の觀察記録を知るのに至便な參考書となるであろう。本書は、現状との比較に参照されるという想定を指針として、意識的に構想された可能性もある。もつとも、既成の固定的な學問分野とそこにおける目下の研究の到達點から評價される有用性という視角からのみ眺めるのは、必ずしも妥當ではない。最近では、歴史學分野でも實地調査が例外的なものではなく、逆に民族學においても文獻資料による歴史的分析が定着するなど、分野や方法が交差しつつある。將來、このような環境が新規の研究分野の創出に繋がっていくとすれば、「インターセクションに立つ」と自稱する本書の眞價を、そのような展開のなかで長期的に見定めていく姿勢も要請されよう。ただ、實利的な立場を離れて、この「邊境」部のムスリムたちに對する、様々な異文化に屬する「他者」たちによる觀察の視線の屈折、言説の起伏を、個々の讀者なりの關心から玩味してみるのも悪くない。本書の孕みもつ魅力は、實はそんなところにあるのかもしれない。

さて、現地での本格的なフィールドワークに基づいて、あるいは當地域住民の手による關連文獻の總體的な検討に立脚して本書の個々の内容を綿密に檢證し、論評を加えることは、もとより評者の力量を超える。ただ、Ⅴ章に關わるものとして、本書で利用されていないムラーハムーサー『ハミド史』のなかに興味深い敘述がいくつも見出される。本書の缺を批判するというのではなく、その敘述スタイルに沿いつつ本書を僅かながら補充するという意味から紹

介しておこう。

まず、一九世紀後半のムスリム反亂期のコムル（ハミに對するウイグル語の呼稱）について『新疆ムスリム研究』は、漢語文獻に基づき、郡王配下の一部の活動との関連において反亂状態が現出する様子を述べている。これに對し、クチャを震源とする反亂の各地への波及という全體的な動向のなかで、コムルでの反亂状態はどのように位置づけられるであらうか。

一八六四年、クチャの反亂で當地の清朝權力が打倒され、クチャのホーシヤ家のラーンディーン・ハーンが主導權を掌握すると、東・西に遠征軍が派遣された。そのうち、クチャのホーシヤ一族のうちのイスハーク・ホーシヤを司令官とする東方遠征軍は、異教徒との戦闘を行いつつトゥルフアンに至り、そこを支配下に収めた。

『ハミード史』によれば、イスハーク・ホーシヤはトゥルフアンよりムッラー・テムール・ハリファとトフタム・バハードゥルを頭目とする人々を使者とし、コムルに進ませたという。一二八二年ムハッラム月一八日（一八六五年六月一三日）、イスハーク・ホーシヤは一六〇〇〇人の軍隊とともにコムル征服に向けてトゥルフアンから出陣した。前述のムッラー・テムール・ハリファらは事前にコムルで蜂起し、「ヒタイ」（≡滿洲人・漢人）たちを一掃してイスハーク・ホーシヤを待っていたといわれる（Lund University Library, Jarring collection, Prov. 163, ff. 56a-56b）。

一方、『欽定平定陝甘新疆回匪方略』巻一〇九、恩麟奏によれば、同治四年五月二四日（一八六五年六月一七日）にトゥルフアンの反亂者ムスリムがハミのトルコ系ムスリムと結合し、にわか反亂を起こしたという。二六日、反亂者たちが南北兩路から城壁を包

圍攻撃したのに對し、清朝側は城のうえから砲撃で應戰した。城内の軍糧は缺乏し、防衛するのが困難となった。火藥庫を燃やし、城内の官吏・兵隊・有力者・住民の大半は命を捨てた。このようにしてハミ城は陥落したといわれる。當記事における、反亂者のハミ城攻撃の日附（一八六五年六月一九日）は、『ハミード史』におけるイスハーク・ホーシヤのコムル征服に向けての出發の日附（六月一三日）の六日後である。トゥルフアン・コムル間は約四〇〇キロメートルあり、一二日行程であるという。これら兩史料における日附と事實關係に基づけば、『方略』におけるハミ陥落の記事が、『ハミード史』にある、イスハーク・ホーシヤ到來前におけるムッラー・テムール・ハリファによる「ヒタイ」一掃という記事と照應するものであることは疑いない。このように、『ハミード史』では、清朝史料にあるコムルの動亂状態の内情が當地へのクチャ反亂勢力の東方への擴大の一環として明確に描寫されているのである。

次に、『新疆ムスリム研究』で、コムル部隊の先頭に立つて反亂軍と戦い、清朝に忠誠を盡し続けたと斷定されているコムルの郡王の反亂下における對應についてはどうだろうか。『ハミード史』によれば、トゥルフアンからコムルに向けて進撃したイスハーク・ホーシヤの軍がコムルに五日行程の地點に至ったとき、「郡王から宿營所、羊、まぐさ・飼料、食料、果物、ナンをいくつかの車と駱駝でもってきた。その後ろから郡王も来て、ホーシヤと面會した。すべての兵隊たちにナン・食料を與え、充足させた。それから郡王は度を越えた贈物を與えた。とくに、四〇〇ヤームブー（≡元寶）、八〇〇頭の去勢馬を贈呈した。羊は無数であった。残りの贈物がどれくらいあったかは、このことから推定して知るであらう。贈り

物と宴會接待を舉行したあと、郡王は前進して(まちに)入っていた。道案内するために人々を任命した。ホーシヤ閣下と究極の勝利の軍隊が地點から地點へと進み、(コムルの)まちに近づいたとき、郡王は再び迎へに出て、まちに導いて入り、大きい最高の宮殿に落ち着かせた。」とある。他の有力者たちにも相當量の贈物をしたといわれる(F. 51b-58a)。すなわち、コムルの郡王は、反亂指導者と軍隊の到来を前にして、自ら率先してかれらをコムルに導き入れ、歡待したというのである。また、そのことと関連すると思われるが、イスハーク・ホーシヤによって事前に派遣された前述のムラー・テムール・ハリーフアが郡王に對し、自分たちがコムルの「ヒタイ」たちを殲滅すると傳へた際、郡王は關知せずという態度をとつた形跡もある。

しかも、郡王によるこのような行動は、當地域における清朝軍勢力が反亂によって拂拭され、當地域における權力として優勢であることが明白となつた反亂者側に依存せざるを得ない狀況に陥つたという判斷のみ基づくもの、とは必ずしもいえない。というのは、『ハミード史』によれば、それ以前に郡王のもとからクチャ反亂勢力の首領であるラーシディーン・ハーンに贈物を携へた使節が派遣されたというからである。一八二〇年代にコーカンド・ハーン國領から清朝版圖に侵入し、暫時カシユガルを中心とする地域を掌握したカシユガル・ホーシヤ家のジ・ハーン・ギール・ハーンが、結局清軍に敗北してその手中に落ちたとき、その衣装や武器・道具がコムルの郡王に讓渡され、家寶として保存されていたという。使節は、クチャのラーシディーン・ハーンのもとに至つてそれらを獻呈した。ラーシディーンはその使者に、金のサツラ(「ターバン」、錦の衣

服、敕書などを下賜し、歸させたという(F. 56b)。コムルの郡王が、カシユガル・ホーシヤ家とは別系統に屬するクチャのホーシヤ家のラーシディーンに使節を送つてこのような献上品を差し出した眞意は測りがたい面もある。あるいは、ラーシディーン・ハーンもジ・ハーン・ギール・ハーン同様、やがては清朝の力のもとに屈服する、という隱された含意がこめられている、と考えられなくもない。しかし、清朝統治に對する「聖戰」を敢行し、自らの支配を樹立した指導者の政權を主體的に承認しようとするものである、と見なす方が自然であろう。ただし、清朝に反亂した指導者の遺物がコムル郡王家に所藏されていたというこの逸話自體の信憑性に、疑義をはさむ人もいふかもしれない。

いずれにせよ、トルコ系住民による一著作が傳へる郡王の行動様式は、『新疆ムスリム研究』におけるそれとは食い違つている。『ハミード史』では、郡王領に對する統治權に根據を與へてきた清朝權力のみに對する忠誠の意圖的な誇示は見られず、個々の狀況下で統治權に保證を與えてくれる、正統性のありそうな權力・軍事勢力ならば、積極的にそれを受容するに吝かでない、という郡王の意向をみてとることができるとある。實際、クチャ方がヤー・クープ・ベグに敗北して危機に直面しているという知らせを受け取つたイスハーク・ホーシヤは、クチャ方面に歸還する際、コムルの管理を當の郡王に委任したといわれる(F. 59f)。

もう一つ、『ハミード史』のコムル関連記事のなかで注目されるのは、郡王領の性格についてのものである。「コムルには一五〇〇〇世帯以上の人がいる。へわれわれはみなコムルの郡王のために勞働する。冬であれ夏であれ、ヒタイたちに一つのものも與えない。

もしコムルに屬する土地からヒタイたちが土塊をとろうとするならば、それがたとえクトマン（＝農具の一種）一ぱいであらうと、郡王の國庫に金銀を與えてからその土を得ることができると、郡王は偉大なハーン以外のいかなる官吏たちにも頭を垂れたりへりくだったりすることはしない。……一五代の世系、あるいはそれ以上ある。偉大なハーンはわれわれをジュルドゥ・ジャサクとして與えたという。このような形で、われわれは（郡王に對する）奴僕の地位で勞働する。ジュルドゥということの意味はこういうことである。と説明した。郡王は、毎年三六〇個のメロン、九つの砥石を（清朝皇帝に）進物として送る。これよりも多くの下賜物を手に入れる。毎年、かれ自身は七四ヤームブー、妻のフジエン・ハニムは三七ヤームブー、數疋の絹織物をハーンの國庫から手にする。三年に一回北京に行く。往復の費用はハーンの國庫からである。行つたときは毎回、少なくとも五〇〇ヤームブーをもつてかえる。と多くの敘述・説明をする。實際には、言つたよりも多いことが知られる。ヒタイに服屬したムスリムたちのなかでコムルの郡王より大きく偉大なムスリムはいない。」とある（H. 58a-58b）。コムルの土地・領民が清朝官吏ではなく、郡王に直接從屬するものであること、それ

が清朝皇帝によって規定されたものであること、郡王が皇帝から多大な恩恵を被つていたこと、などが述べられている。郡王のコムル地區における権力の性格を、コムル以外の出身であるムスリムの一著者はこのように認識していたのである。また、『ハミード史』によれば、コムルではイスラム信仰が純粹で、イスラム法の執行が嚴格であり、マドラサなどにおける教育が熱心に施されていたという（H. 58c）。これは、『新疆ムスリム研究』において掲げられた記事と合致するものと言える。

以上のような補充は、他の部分でも可能であらう。例えば、二〇世紀前半にカシュガルなどに據點を形成していたスウェーデン人傳道團は、まさに本書に言うところの「氏族誌」に關わる相當量の報告を残している。ともあれ、『新疆ムスリム研究』の部分・部分の中核もしくは周邊部として、様々なテーマに沿い、本書で用いられていない史料も含めたテキストの集積を、讀者自らの望む形で重層的に構築していくことも可能であらう。

一九九五年二月 吉川弘文館
A 5判 頁三三六二頁 一二〇〇〇圓